

平成二十六年 度

問題冊子

国	教
語	科
国	科
語	目
12	ページ数

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いつさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 問題の内容についての質問には、いつさい応じないが、その他の用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。
3. 試験終了時には、解答用紙を机上の右側に置くこと。
4. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

〔1〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人間は言語をバイカイにした意味の世界に生きる存在であり、他の生物とは比べものにならないほど外界に開かれた認知構造に支えられている。ところで生物は何らかの閉鎖回路の内部でしか、安定した生を営みません。体温、水分の割合、カリウムなどの無機物含有量が一定の範囲以上に変化しないように自らの内部環境を絶えず調節し、変化に富んだ外界にズイジ適応しながら生物は生存している。同様に、認知的に外に開かれた人間には、外部に拡大した自己を閉じるための装置が必要です。文化は、体外に創出された〈内部〉であり、したがって社会制度に人間が依存するのは当然です。

文化は様々な規範・価値を通して我々の思考・行動に制限を加えます、そのおかげで日常生活の行為が可能になる。攻撃するつもりがないと知らせるために、犬ならば尻尾を振ります。この行動は遺伝子的にほぼ決定されている。しかし生物としての所与に対して人間はもつと自由であり、好意を示すという同じ目的のために多様な表現が可能です。したがって社会制度が我々の思考や行動に制限を加えなければ、好意を示すためにどのような表現をすべきかの決定さえできません。また相手の方も、示された表現がどういった意味を持つのかを判断できない。生物学的所与から多大の自由を獲得しつつも、安定した生を人間が営めるのは、その補償作用として社会が人間の自由を制限するからです。

ところで、他者が行使する強制力として規制が感じられると、社会生活が円滑に営まれないので、社会規制に何らかの正当性が付与される必要があります。集団が及ぼす力は、外部から強制される暴力としてではなく、内面化された規範の形を取って自然な感情の下に服従を促すのが望ましい。

マックス・ヴェーバーによれば、支配とは次のような関係を言います。少なくとも二人の個人あるいは集団AとBの間に上下関係が存在している。そしてAが発した命令・示唆に適合した行動をBが取り、かつ、Aからの命令・示唆がなければ、Bはその行為を実行しない場合に、AはBを支配すると形容される。

〔注〕 1 儒・釈・道三教―儒教・仏教・道教の三つの教え。

2 小説演義―小説の一形式。歴史事実に脚色を加え、口語を交えて著したもの。 3 商賈―商人。

4 斥言―はつきりと言う。 5 津津楽道―悦んで口に出す。 6 子弟―若者。

7 逸居―気ままに暮らす。

問一 傍線部①をすべて平仮名で書き下せ。

問二 傍線部②は、どういうことを、何を根拠に言っているか。具体的に説明せよ。

問三 傍線部③の具体的な内容を言っている部分を文章中より抜き出し、その始めと終わりの五字をそれぞれ書け。ただし句読点や送り仮名は含まない。

問四 傍線部④を、「其」が指す内容を明示して、わかりやすく口語訳せよ。

問五 傍線部⑤で、刑事事件や強盗事件がますます増える現状に、世の人々がその理由を考えあぐねているとされるが、ではその理由はどこにあるのか。文章内容に即してわかりやすく説明せよ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ(設問の都合で、送り仮名を省いたところがある)。

古有^①儒・釈・道三教、自^②明以来、又多^③一教曰^④小説。小説演義之書、未嘗自以為教也。而士大夫・農・工・商賈無^⑤不^⑥習聞之、以至^⑦兒童・婦女・不識^⑧字者、亦皆聞而如見^⑨之。是其教較^⑩之儒・釈・道而更^⑪広也。釈・道猶勸^⑫人以^⑬善、小説專導^⑭人以^⑮惡。姦邪淫盜之事、儒・釈・道書所^⑯不^⑰忍^⑱斥言^⑲者、彼必^⑳尽^㉑相窮^㉒形、津津^㉓樂^㉔道、以^㉕殺^㉖人為^㉗好漢、以^㉘漁^㉙色為^㉚風流、喪心病狂、無^㉛所^㉜忌憚^㉝。子弟之逸居無^㉞教者多矣、又有^㉟此等書以^㊱誘^㊲之、曷怪^㊳其近^㊴於禽獸^㊵乎。世人習而^㊶不^㊷察、輒^㊸怪^㊹刑獄之日繁、盜賊之日熾、豈知^㊺小説之中^㊻於人心風俗^㊼者、已^㊽非^㊾一朝一夕之故^㊿也。

(錢大昕『潛研堂文集』)

ここで問題は支配を可能にする手段・方法です。物理的な強制力や拘束力、すなわち殺傷したりキガ状態にいたりして直接的にまたは間接的に苦しみを与える能力だけが、支配形態の発生と存続を可能にするものではありません。それどころか反対に、継続する安定した支配はこのようなき出しの強制力によつてはもたらされない。「一定最小限の服従意欲、すなわち服従に対して外的あるいは内的な利害関心のあることが、あらゆる真正な支配関係の要件である」とヴェーバーは述べます。真の支配においては命令意志が根拠あるものとして現れる。つまり支配関係に対する被支配者自身の合意が必要です。

そしてその合意が強制力の結果として現れずに自然な感情として感知されればされるほど、支配は強固になる。支配が理想的な状態で保たれる時、支配はその真の姿を隠蔽し、自然のセツリの表現であるかのごとく作用する。国王の前で頭を垂れ、親・先輩・上司・教師に従順を示すのも支配です。

安定した社会秩序維持に支配は必要不可欠です。支配から自由な社会は空想の産物にすぎず、そのようなユートピアは「どこにもない場所」というギリシャ語の原義通り、建設しようがありません。人類の努力が足りないから、支配から解放された世界が実現しないのではない。支配は社会および人間の同義語だと言ってもよいほど、我々の生活の根本を成しています。支配関係の消失は原理的にありえません。社会には必ずヒエラルキーが発生し、人々の地位の違いは何らかの方法で正当化される必要がある。そうでなければ絶えず争いが生じ、社会が円滑に機能しない。

近代民主主義社会も平等ではなく、人々の間に上下格差があります。不平等は社会生活の本質的姿でさえあります。もちろん時代や地域により不平等の形態は様々であり、それに対する正当化の仕方も異なります。しかしどんな形態の社会であれ、格差が完全になくはない。キョウコウ路線を推進する労働組合幹部でも完全な平等は望みません。新入社員と勤続三〇年の社員に同じ待遇を与え、社長も部長も平社員も全員同じ給料にするべきだと考える人はいません。

人間は常に他者と自分を比較しながら生きている。そして比較は必然的に優劣をつける。『広辞苑』で「欲望」を引くと「不足を感じてこれを満たそうと望む心」と説明されています。問題は客観的な欠如ではない。恋愛の例がわかりやすいでしょう。美しい人に出会うだけでは恋愛感情は必ずしも生まれない。最初は気にもとめていないのに、その人に注目するライバルを身近に感

じた時、にわかにはその人を独り占めしたくなる。ライバル関係の導入により、相手の絶対価値が社会での相対価値に変換される。ダイヤモンドの指輪や高級時計などを欲しがると同じです。

テレビ番組で有名人の持ち物を紹介する時しばしば値段を告げる。これはモノ自体の評価が背景に退き、価格という共通基準によつて一元的に比較される事態を意味します。人間はモノと直接に関係を持たず、他者との関係を通してモノと関わる。だから給料などの格差は単なる経済的次元を超えて、人間の価値比較に結びつきます。格差はなくならない。他者との比較が自己同一性の維持と密接な関係にあるからです。

(小坂井敏昂「社会心理学講義」)

問一 傍線部ア、イのカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部①「社会制度に人間が依存するのは当然」とあるが、なぜそう言えるのか。前後をふまえてわかりやすく説明せよ。

問三 傍線部②「内面化された規範」とは何か。二十字以内で答えよ。

問四 傍線部③「支配から自由な社会は空想の産物にすぎず」とあるが、なぜそう言えるのか。簡潔に答えよ。

問五 傍線部④「相手の絶対価値が社会での相対価値に変換される」とはどういうことか。わかりやすく答えよ。

問一 傍線部 a、e の語句の意味を記せ。

問二 傍線部①を口語訳せよ。

問三 傍線部②「御文奉りたまふ」の敬語表現法について説明せよ。

問四 傍線部③。「君」が誰であるかを明らかにせよ。その上で、誰が誰を、どのように思う気持ちを読み取ることができるか、根拠を挙げつつ説明せよ。

問五 傍線部④を口語訳せよ。

[3]

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

天人の中に、持たせる箱あり。天の羽衣入れり。またあるは、不死の薬入れり。一人の天人いふ、「壺なる御薬たてまつれ。穢きたなき所の物aきこしめしたれば、御心地悪しからむものぞ」とて、持て寄りたれば、いささかなめたまひて、すこし、形見とて、脱きぬぎ置く衣きぬに包かむむとすれば、在る天人包かむませず。御衣みぞをとりいでて着せむとす。

その時に、かぐや姫、「しばし待て」といふ。「衣着せつる人は、心異になるなりといふ。物一言いひ置くべきことありけり」といひて、文書く。天人、「遅し」と、心もとながりたまふ。

かぐや姫、「物知らぬこと、なのたまひぞ」とて、いみじく静かに、朝廷おほやけに御文奉りたまふ。あわてぬさまなり。

かくあまたの人を賜ひて、とどめさせたまへど、許cさぬ迎へまうで来て、取り率てまかりぬれば、口惜しく悲しきこと。宮仕へ仕うまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にてはべれば。心得ず思しめされつらめども。心強くうけたまはらずなりにしこと、なめげなるものに思しめしとどめられぬるなむ、心にとまりはべりぬる。

とて、

今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける

とて、壺の薬そへて、頭中将呼び寄せて奉らす。

中将に、天人とりて伝ふ。中将とりつれば、ふと天の羽衣うち着せたてまつりつれば、翁おきなを、いとほし、かなしと思しつることも失せぬ。この衣着④つる人は、物思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、のぼりぬ。

〔竹取物語〕

〔2〕

次の文章は、昭和十二年に発表された、太宰治「燈籠」の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

私は、まずしい下駄屋の、それも一人娘でございます。私は、ことし二十四になりますけれども、それでもお嫁に行かず、おむこさんも取れずにいるのは、うちの貧しいゆえもでございますが、母は、私の父と話し合ってしまったて、地主さんの恩を忘れて父の家へ駆けこんで来て間もなく私を産み落し、私の目鼻立ちが、地主さんにも、また私の父にも似ていないとやらで、いよいよ世間を狭くし、一時はほとんど日陰者あつかいを受けていたらしく、そんな家庭の娘ゆえ、縁遠いのもあたりまえでございます。もつとも、こんな器量では、お金持の華族さんの家に生れてみても、やつぱり、縁遠いさだめなのかも知れませぬけれども。それでも、私は、私の父をうらんでいません。母をもうらんで居りませぬ。私は、父の実の子です。誰がなんと言おうと、私は、それを信じて居ります。父も母も、私を大事にして呉れます。私も、ずいぶん両親を、いたわります。父も母も、弱い人です。実の子の私にさえ、何かと遠慮をいたします。弱いおどおどした人を、みんなでやさしくいたわらなければならぬと存じます。私は、両親のためには、どんな苦しい淋しいことにも、堪え忍んでゆこうと思っていました。けれども、水野さんと知合いになつてからは、やつぱり、すこし親孝行を怠つてしまいました。

申すも恥ずかしいでございます。水野さんは、私より五つも年下の商業学校の生徒なのです。けれども、おゆるし下さい。私には、ほかに、仕様がなかったのです。水野さんとは、ことしの春、私が左の眼をわずらつて、ちかくの眼医者へ通つて、その病院の待合室で、知合いになつたのでございます。私は、ひとめで人を好きになつてしまうたちの女でございます。やはり私と同じように左の眼に白い眼帯をかけ、不快げに眉をひそめて小さい辞書のペエジをあちこち繰つてしらべて居られる御様子は、たいへんお可哀そうに見えました。私もまた、眼帯のために、うつうつ気が鬱して、待合室の窓からその椎の若葉を眺めてみても、椎の若葉がひどい陽炎に包まれてめらめら青く燃えあがっているように見え、外界のものがすべて、遠いお伽噺の国の中に在るように思われ、水野さんのお顔が、あんなにこの世のものならず美しく貴く感じられたのも、きつと、あの、私の眼帯の魔法が手伝つていたと存じます。

これが、手紙の全文でございます。私は、水野さんが、もともと、お金持の育ちだったことを忘れていました。

針の筵の一日一日がすぎて、もう、こんなに涼しくなつてまいりました。今夜は、父が、どうもこんなに電燈が暗くては、気が滅入つていけない、と申して、六畳間の電球を、五十燭のあかるい電球と取りかえました。そうして、親子三人、あかるい電燈の下で、夕食をいただきました。母は、ああ、まぶしい、まぶしいといつては、箸持つ手を額にかざして、たいへん浮き浮きはしゃいで、私も、父にお酌をしてあげました。私たちのしあわせは、所詮こんな、お部屋の電球を変えることくらいなものだ、とこっそり自分に言い聞かせてみましたが、そんなにわびしい気も起らず、かえつてこのつつましい電燈をもした私たちの一家が、ずいぶん綺麗な走馬燈のような気がして来て、ああ、覗くなら覗け、私たち親子は、美しいのだ、と庭に鳴く虫にまでも知らせてあげたい静かなよろこびが、胸にこみあげて来たのでございます。

(本文は原則として、新潮社刊の太宰治『きりぎりす』に基づき、一部省略した箇所がある。)

問一 傍線㉑、㉒の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 傍線部①とあるが、「私」が「水野さん」に惹かれた理由として「眼帯の魔法」の他にどのような事情が示唆されていると考えられるか、推察せよ。

問三 「私」が傍線部②のように述べた理由を、以下の「私」の発言に即してまとめよ。

問四 傍線部③とあるが、「私」がこの手紙に失望した理由を説明せよ。

問五 この小説の題名は「燈籠」であり傍線部④のような表現で結ばれている。このことの意味を、本文における「私」の心情変化に即して詳しく説明せよ。

水野さんは、みなし児なのです。誰も、しんみになつてあげる人がないのです。もとは、仲々の薬種問屋で、お母さんは水野さんが赤ん坊のころになくなられ、またお父さんも水野さんが十二のときにおなくなりになられて、それから、うちがいけなくなつて、兄さん二人、姉さん一人、みんなちりぢりに速い親戚に引きとられ、末子の水野さんは、お店の番頭さんに養われることになつて、いまは、商業学校に通わせてもらつているものの、それでもずいぶん気づまりな、わびしい一日一日を送つて居られるらしく、私と一緒に散歩などしているときだけが、たのしいのだ、とご自分でもしみじみそうおつしやつていたことがございます。身のまわりに就いても、いろいろとご不自由のことがあるらしく、ことしの夏、お友達と海へ泳ぎに行く約束をしちゃつたとおつしやつて、それでも、ちつとも楽しそうな様子が見えず、かえつて打ちしおれて居られて、その夜、私は盗みを行いました。男の海水着を一枚盗みました。

町内では、一ばん手広く商つている大丸の店へすつとはいつていつて、女の簡單服をあれこれえらんでいるふりをして、うしろの黒い海水着をそつと手繰り寄せ、わきの下にびつたりかかえこみ、静かに店を出たのですが、二三間あるいて、うしろから、もし、もし、と声をかけられ、わあつと、大声発したいほどの恐怖にかられて気違いのように走りまわりました。どろぼう！ という太いわめき声を背後に聞いて、がんと肩を打たれてよろめいて、ふと振りむいたら、ぴしゃんと頬を殴られました。

私は、交番に連れて行かれました。交番のまえには、黒山のように人がたかりました。みんな町内の見知つた顔の人たちばかりでした。私の髪はほどけて、ゆかたの裾からは膝小僧さえ出ていました。あさましい姿だと思ひました。

おまわりさんは、私を交番の奥の畳を敷いてある狭い部屋に坐らせ、いろいろ私に問いただしました。色が白く、細面の、金縁の眼鏡をかけた、二十七、八のいやらしいおまわりさんでございました。ひととおり私の名前や住所や年齢を尋ねて、それをいちいち手帖に書きとつてから、急ににやにや笑いだして、

——こんどで、何回めだね？

と仰いました。私は、ぞつと寒気を覚えました。私には、答える言葉が思い浮ばなかつたのでございます。まごまごしていたら、これは牢屋へいれられる、重い罪名を負わされる。なんとかして巧く言ひのがれなければ、と私は必死になつて弁解の言葉

を捜したのでございますが、なんと言い張つたらよいのか、五里霧中をさまよう思いで、あんなに恐ろしかったことはございませぬ。叫ぶようにして、やっと言い出した言葉は、自分ながら、ぶざまな唐突なもので、けれども一こと言いだしたら、まるで狐につかれたようにとめどもなく、おしゃべりがはじまって、なんだか狂つていたようにも思われます。

② 私を牢へいれては、いけません。私は悪くないのです。私は二十四になります。二十四年間、私は親孝行いたしました。父と母に、大事に大事に仕えて来ました。私は、何が悪いのです。私は、ひとさまから、うる指ひとつさされたことがございませぬ。水野さんは、立派な人です。いまに、きつと、お偉くなるおかたなのです。それは、私に、わかつて居ります。私は、あのおかたに恥をかかせたくなかったのです。お友達と海へ行く約束があったのです。人並の仕度^③をさせて、海へやろうと思つたんだ。それがなぜ悪いことなのです。私は、ばかです。ばかなんだけれど、それでも、私は立派に水野さんを仕立ててごらんにいれます。あのおかたは、上品な生れの人なのです。他の人とは、ちがうのです。私は、どうなつてもいいんだ、あのひとさえ、立派に世の中へ出られたら、それでも、私はいいんだ、私には仕事があるのです。私を牢にいれては、いけません。私は二十四になるまで、何ひとつ悪いことはしなかった。弱い両親を一生懸命いたわつて来たんじゃないか。いやです、いやです、私を牢へいれては、いけません。私は牢へいられるわけではない。二十四年間、努めに努めて、そうしてたった一瞬、ふつと間違つて手を動かしたからつて、それだけのことで、二十四年間、いいえ、私の一生をめちゃめちゃにするのは、いけないことです。まちがつています。私には、不思議でなりません。一生のうち、たつたいちど、思わず右手が一尺うごいたからつて、それが手癖の悪い証拠になるのでしょうか。あんまりです、あんまりです。たつたいちど、ほんの二、三分の事件じゃないか。私は、まだ若いのです。これからの命です。私は、いままでと同じようにつらい貧乏ぐらしを辛抱して生きて行くのです。それだけのことなんだ。私は、なんにも変つていやしない。きのうのままの、さき子です。海水着ひとつで、大丸さんに、どんな迷惑がかかるのか。人をだまして千円二千円しぼりつつも、いいえ、一身代つぶしてやつて、それで、みんなにほめられている人さえあるじゃございせんか。牢はいつたい誰のためにあるのです。お金のない人ばかり牢へいれられています。私は、強盗にだつて同情できるんだ。あの人たちは、きつと他人をだますことの出来ない弱い正直な性質なんだ。人をだましていい生活を

するほど悪がしこくないから、だんだん追いつめられて、あんなばかげたことをして、二円、三円を強奪^④して、そうして五年も十年も牢へはいつていなければいけない。ははは、おかし、おかし、なんてこつた、ああ、ばかばかしいのねえ。

私は、きつと狂つていたのでしょう。それにちがひございませぬ。おまわりさんは、蒼い顔をして、じつと私を見つめていました。私は、ふつとそのおまわりさんを好きに思いました。泣きながら、それでも無理して微笑^⑤んで見せました。どうやら私は、精神病者のあつかいを受けたようございませぬ。おまわりさんは、はれものにさわるように、大事に私を警察署へ連れていつて下さいました。その夜は、留置場へとめられ、朝になって、父が迎えに来て呉れて、私は、家へかえしてもらいました。父は家へ帰る途中、なぐられやしなかつたか、と一言そつと私にたずねたきりで、他にはなんにも言いませんでした。

その日の夕刊を見て、私は顔を、耳まで赤くしました。私のことが出ていたのでございませぬ。万引にも三分の理、変質の左翼少女^⑥滔々と美辞麗句、という見出しでございました。恥辱は、それだけでございませぬでした。近所の人たちは、うろろう私の家のまわりを歩いて、私をはじめは、それがなんの意味かわかりませんが、みんな私の様を覗^⑦きに來ているのだ、と氣附いたときには、私はわなわな震えました。私のあの鳥渡^⑧した動作が、どんなに大事件だったのか、だんだんはつきりわかつて來て、あのとき、私のうちに毒薬があれば私は氣樂に呑んだことございませぬし、ちかくに竹藪^⑨でもあれば、私は平気で中へはいつていつて首を吊つたことございませぬし、二、三日のあいだ、私の家では、店をしめました。

やがて私は、水野さんからお手紙いただきました。

——僕は、この世の中で、さき子さんを一ばん信じている人間であります。ただ、さき子さんには、教育が足りない。さき子さんは、正直な女性なれども、環境に於いて正しくないところがあります。僕はその個所を直してやろうと努力して來たのであるが、やはり絶対のものがありません。人間は、学問がなければいけません。先日、友人とともに海水浴に行き、海浜にて人間の向上心の必要について、ながいこと論じ合つた。僕たちは、いまに偉くなるだろう。さき子さんも、以後は行いをつつし、犯した罪の万分之一にても償い、深く社会に陳謝^⑩するよう、社会の人、その罪を憎みて、その人を憎まず。水野三郎。(読後かならず焼却のこと。封筒もともに焼却して下さい。必ず。)

国語問題訂正

訂正

国語

問題冊子 1ページ

〔1〕 問題文の12行目

(誤) 強制力として規制が

(正) 強制力として規則が

問題冊子 3ページ

〔1〕 問題文の1行目

(誤) 社会での相対価値に

(正) 社会での相対評価に

問題冊子 3ページ

〔1〕 問五 設問の文

(誤) 社会での相対価値に

(正) 社会での相対評価に

問題冊子 5ページ

[2] 問題文の3行目

(誤) 速い親戚に

(正) 遠い親戚に

問題冊子 8ページ

[2] 問題文の6から7行目

(誤) 私たちの一家が

(正) 私たち一家が